

一章 たかすの「鷲」はどうしてついたのか？

― 解説「鷲見大鑑」 高鷲の鷲退治と歴史 ―

美濃国郡上郡鷲見郷鷲見大鑑（裕孝司氏所蔵）

一 鷲狩伝説

鷲見大鑑とは平安時代の終わりから戦国時代の終わりにわたり、鷲見郷（現在の岐阜県郡上市高鷲町）を治めた鷲見氏の活躍の歴史が書かれている古文書です。書かれた時代は江戸時代と考えられます。鷲見大鑑の内容は鷲狩りが中心ですがその他に鷲見氏の活躍についてのいくつかのエピソードや鷲見郷の様子がわかる内容が書かれています。また、鷲見大鑑は高鷲に二つ残っています。一つは高鷲町向鷲見地区の蓑島小左衛門家に残されていたもの（現在は鷲見の裕孝司氏所有）ともう一つは高鷲町鮎走地区所有のものがあります。

鷲見殿（藤原頼保のこと）のお生まれについてお尋ねしたところ、京の都の朝廷に関する仕事をされている大宮様の二男で「と記丸様」といいます。平安時代の終わり、今から八二〇年以上前にご誕生になられ、その後、お名前を武蔵権守様と申されました。その時代（平安末期）は、天皇が世を治められていた時代でした。

天皇は正月二日に夢をみられ（図1）、

『この京の場所から北東に不思議にも鷲が巢を作っている』
というところで目が覚められました。天皇は、武蔵権守様に

『鷲を退治せよ』

と命じられましたので、武蔵権守様は家来三六人を連れて美濃の国（岐阜県）へやって来しました。

岐阜の奈ヶ良（現在の岐阜市長良と考えられる）というところでご宿泊され、奈ヶ良の渡し舟に乗られたところ、川上より鷲の羽根が一羽根流れてきましたので、権守様は不思議に思い、その羽根を自分の手で拾われました（図2）。拾われた白い羽根を見ると、長さ四尺七寸（約一四一cm）、その内側に金色で「八幡」という文字が書いてありました。それで、



図1 天皇は鷲の夢をみる

今回の解説は両方の鷲見大鑑を掲載しました。二つの文章を比較・検討・研究してみるととても興味深いことがわかるのではないかと思います。



図2 武蔵権守が八幡の鷺の羽根を拾う

『このような大きな羽が流れてくるところを見ると、この川上に鷺の巢があるに違いない』

と思われ、郡上郡へと上られました。そして、その羽根を小野村（現在の八幡町小野）にお預けになりました。そしてその時にお宮を建てられ、八幡と書いてあつた羽根

を奉納し、小野八幡神社と名付けられました。

さて、権守様は八幡より家来を分けられ、明方村方面と小駄良方面へむかわせました。権守様は上之保（長良川の八幡より上流域の地名で現在の大和町・白鳥町・高鷺町の地域）へと進まれ、神路村にご宿泊なされ、その夜に神のお告げを受けられました。それによると

『この川上に雲ヶ嶽（現在の鷺ヶ岳）という険しい山がある。急いで雲ヶ嶽へ登るように』

という夢でした。権守様は急いで神路を出発し、雲ヶ嶽を目指されました。この時よりここを神の路と書いて「かんじ」（現在の大和町神路）というようになりました。

そして権守

様は岩高村（現在の高鷺町向鷺見岩高）で宿をとられ（図3）、鷺見の山口才三郎という者に案内させ、雲ヶ嶽へ登られました。すると鷺の鳴

き声がかすかに聞こえ、さらに三丁（約三二七m）ばかり進むと、確かに二声の鳴き声が聞こえました。権守様はこの谷の奥深くに鷺の巣があるに違いないと思われ、この小二声、大二声というところで休憩されました。

さらに谷深い山の奥に登られると、不思議なことに鷺の羽根が二羽根落ちているのを発見され、これを拾われました。それ以来この地を大城・羽落といひます。

権守様はその間、五日間にわたり鷺を探されましたが、発見できませんでした。さらに山奥の道がなくなる所まで行かれました。しばらくして岩高村の小左衛門という者が、百姓を三人連れて迎えに来ました。小左衛門は権守様へ、

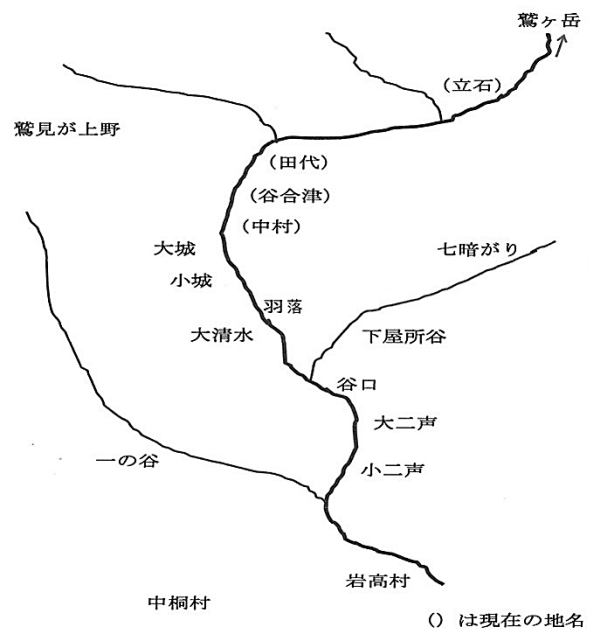


図3 鷺見村の地図

『鷲の巢の在りかはわからないようなので、お迎えに上がりました』

と申し上げると、権守様は

『たとえ五日から七日かかっても鷲の巢の在りかを見届けたい』

と言われました。小左衛門は、

『さらに山深い奥へ行かなければ発見できないでしょう。ここはひとまず宿へ帰られては』

と申し上げました。すると権守様は、

『お前の言うとおり、ひとまず帰るとしよう』



図4 武蔵権守は鷲を退治する

と申され、家来八人を小城・大城に残し、小左衛門の案内で「下屋どこ」というところから、尾根

伝いに「七暗がり」、「谷口」を通つて岩高村に帰

られました。その時からこの地を向鷲見村とい

うようになりました。

権守様は一日間こ

こにご逗留なされまし

た。その時、山口才三郎

が来て

『四日ほど前から、ここから雲ヶ嶽までの八合目のところに日の出の四つ（午前一〇時）頃、時々鷲が目撃されました』

と申したので、権守様は大変喜ばれ、人足六人と小左衛門

と共に一緒に登られて、「やつが尾大清水」というところに大きな庵を作られました。それから人足たちに雲ヶ嶽への道を切り

開かせ、いよいよ五月上旬にお登りなされました。現在、「大屋」というところは、この所です。同じ日に、権守様は鷲の巢を発

見なされ、とうとう鷲をみつけて、捕えられました（図4）。権守様はその鷲をご覧になり、「大石打」という尾羽根が一羽根な

いことから、

『これは奈ヶ良で拾い上げ

た羽根と同じ鷲の羽根に間違いない』

といわれました。それから

六月二三日に都へお戻りになられ、天皇にご報告なさり、

二羽の鷲の子をご献上されると（図5）、天皇は大変喜ば

れ権守様に、ご家名を改めさせ、鷲見家保の名前をお与え

になりました。

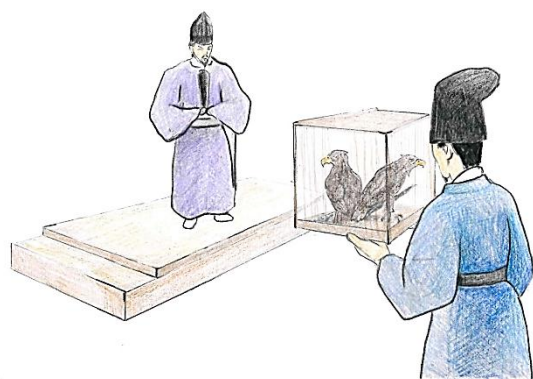


図5 天皇へ鷲の子を献上する

二 鷲退治の後の歴史

その後建長三年（一二五一）五月十二日に権守様は美濃の国芥見庄（現在の岐阜市芥見）内の川西・川東（川は現在の長良川）の領地（一六二三石）を永代知行下されました。

「鷹見のご役料」によつて向鷲見村にお城（鷲見城）（図6、四章参照）をおつくりなされ、ご普請の検分役に鷲見郷お役人の稲葉大膳様に仰せつけられ、建長五年

八月三日に二年間かけ、お城ができました。

その後建武三年（一二三七）六月二七日に飛騨の国と美濃の国の境界を定められた時に、飛騨の国の山下豊前守様、川尻備中守様、美濃の国より鷲見加賀守様並びに遠藤大蔵守様、鷲見村大屋氏が立会された上で、鷲見ヶ上野の境に杭をお立て

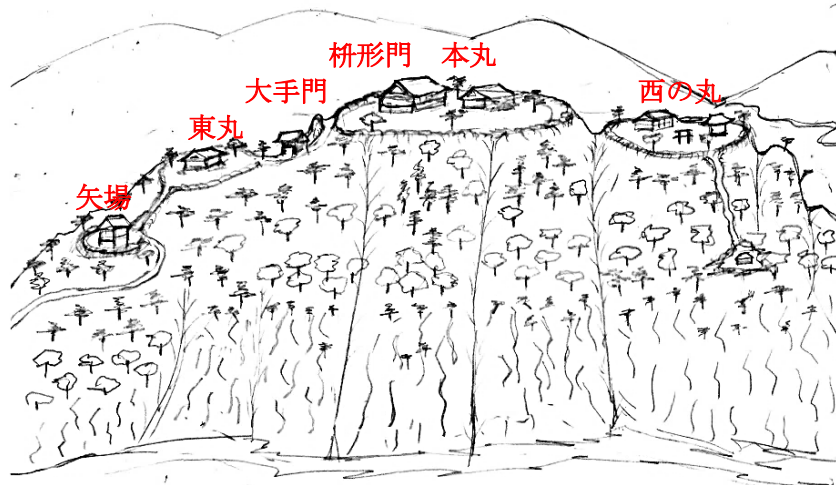


図6 向鷲見村に鷲見城をつくる（1253年）

なされました。その時に鷲見加賀守様は灰を五百俵、川尻備中守様は米ぬか千俵をお埋めなされ、両国の国境ができました。

（二章参照）

三 八幡城の戦い

慶長五年（二六〇〇年）に遠藤慶隆殿が稲葉大膳（貞通）殿を攻めた時（図7）に、金森可重殿（飛騨の藩主）は遠藤殿（後の郡上藩主）のご加勢に飛騨国からやってこられました。遠藤殿は白川口より美濃国へ出陣されました。その時、飛騨の山下豊前は金森殿とは同じくせず、「まちや白川」に陣を構えました。その時からこの場所は町屋村（現在の荘川町町屋）といえます。金森殿は長滝の長瀧寺へ入る予定でした。その時稲葉佐兵衛という美濃の国の者が金森殿に奉公しており、畑佐口より戦いに入つて、早馬に乗り、鷲見上野の「一のくた谷」で金森殿に出会いました。金森殿はその時「三の谷」にて馬より降りられ、白山大御前の神を拝しなされました。それからそこを「伏し尾上」というようになります。その日の午の刻（午前十一時から一三時）より大雨が降り谷々は大水が出て、鷲見川と上の谷は両方とも大水となり、鷲見川の出合の所で軍勢は立ちすくんでいて、金森殿は少し後でした。先鋒の将は金森市左衛門でした。市左衛門は川が深く、大将には川を渡らせないようにと、三

木甚右衛門に命じ、金森殿を案内させました。それより金森殿は馬の鞍を掛け替えて、「住屋尾（炭屋尾）」伝いに中桐村（高鷺町中切）へ向かわれました。一方、市左衛門は小さな谷でも水は深かったのですが、馬に乗って向かいの岸へ渡りました。それを見て兵達は、一度に我も我もと向こう岸に泳いで渡りました。その時よりここを「惣（お）よぎ」というようになりしました。市左衛門が「歩岐（川岸の崖の様な所）」へ来て見ると橋が落とされていました。そのため市左衛門は兵と共に、「八やが尾」伝いに小二声に出ました。その時、向鷺見村には恨みがあるため、道路沿いの百姓の家に火をかけ焼き払い、その後、長瀧寺池之坊（図8）というお寺にお泊りになり、池之坊の案内で八幡尾崎山に陣をとり、「かすみの城（尾崎



図7 戦いの様子

城」より矢を引きました。鷺見忠左衛門は五〇騎で大手口を守りました。忠左衛門にとつては運が悪く軍兵一人に打たれ、山下家内家老と甚内の三人は八幡桜町の大坂歩岐で彌川佐兵衛と渡り合い、槍にて手をあわせ兩人くみうちの勝負となり、鷺見忠左衛門は運が悪く、甲の鎖を切られ、彌川六郎の槍にて討ち死になされました。その時、餌取佐助も討ち死にしました。

忠左衛門のお寺は、長瀧寺本覚坊の末寺であり東前谷にあった、寺領二一石給わった鷺見郷岩高山無元寺という真言宗のお寺であり、ここに祀られました。この時から愛宕七人衆といわれ、八幡町愛宕に愛宕七人塚として祀られました。（現在は愛宕五人塚といわれています。この「八幡城の戦い」については三章で取り上げますが、実際には忠左衛門は攻める方でした。）

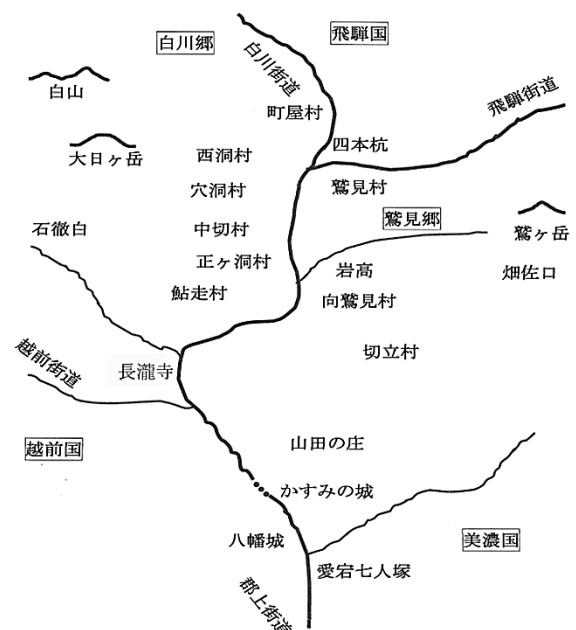
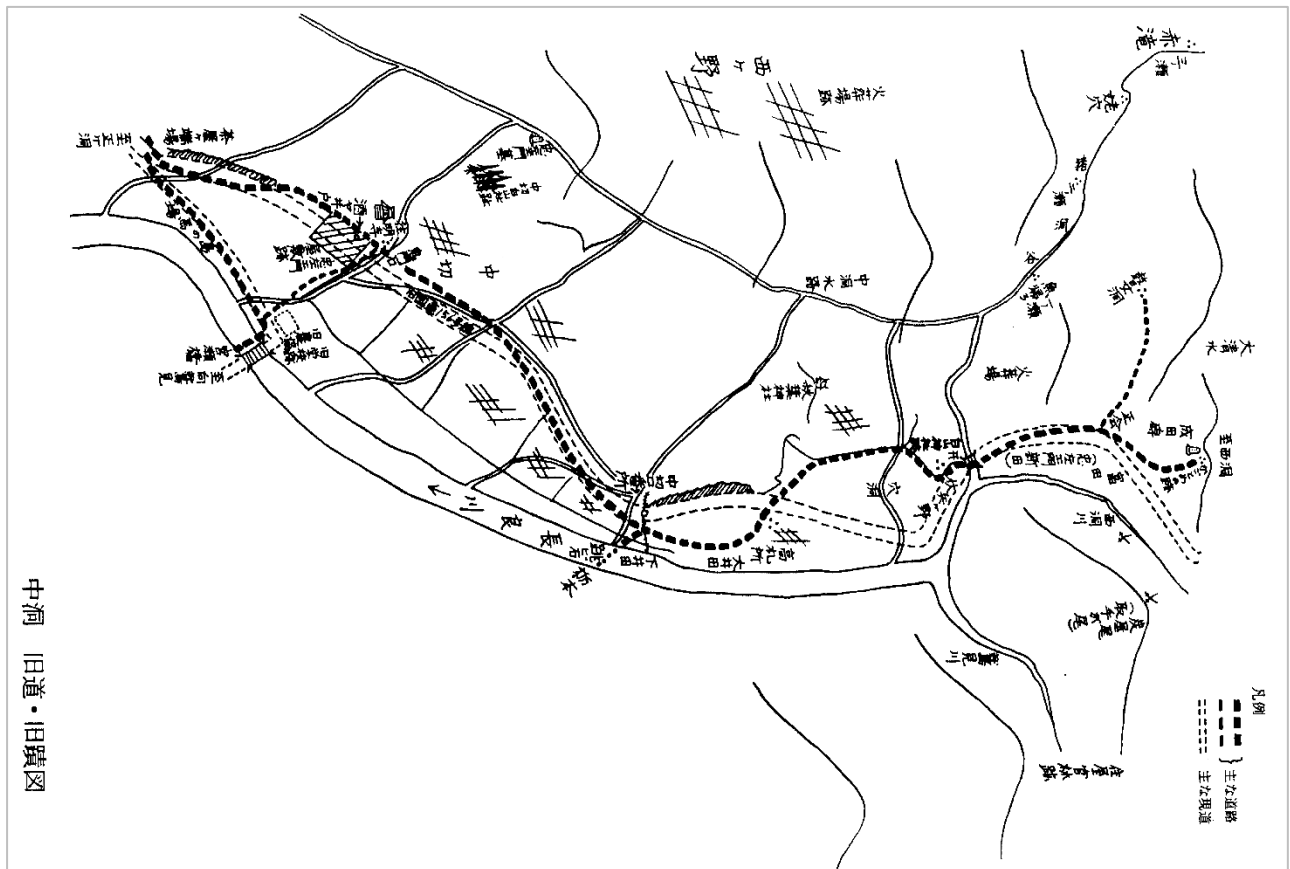
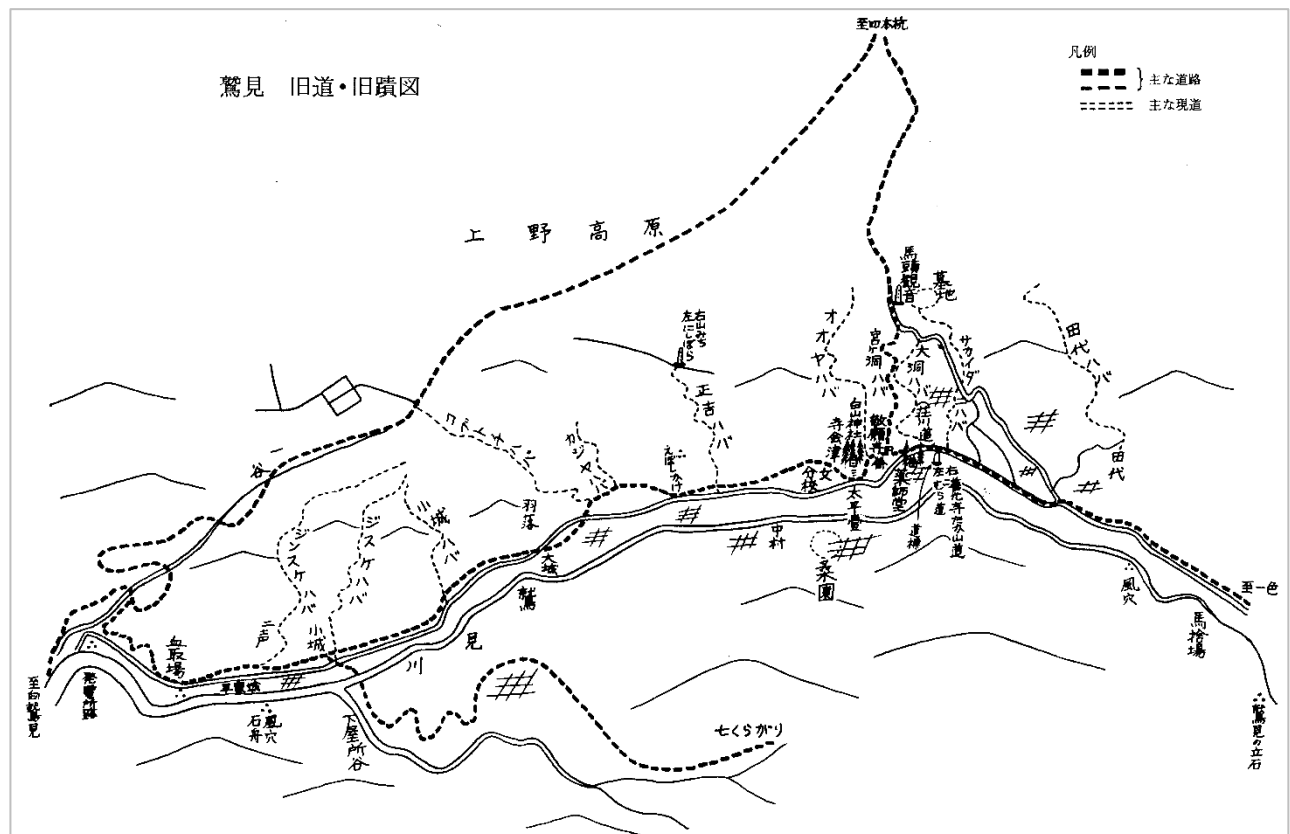


図8 関連する位置関係



鷺見大鑑には高鷺の地名の由来が出てきます。この地図で大体の位置がわかります。



関連地図（高鷺村史続編より）

四 その後の驚見城

慶長年中（一五九六～一六一五）、驚見忠左衛門は討ち死にし、同一〇月に正ヶ洞村（高鷲町正ヶ洞）の餌取弾正と申す者は忠左衛門の討ち死にを聞き、急いで、お城の柳の丸へ乗り込みました。その時、留守役人の松下五左衛門と申すものが下屋敷で留守居役を勤めていて、

『餌取弾正が城へ乗り込んだのは無念の至りであるが、何もせずにただで城を渡すべきではない』

と考え、弾正を打ち取ろうと計画し、その日の四つ時（現在の午前一〇時ごろ）より柳の丸へ行き、

『弾正殿がお城を望むのはごもつともであります、手前は牢人（主をなくした武士）の身であります、今日は日長であります。今晚は碁を打ちに参りたいと思いますので灯りの用意をしてほしい』

と申し上げました。弾正も碁を望み、堅く約束をしました。

その夜の暮方に松下五左衛門は柳の丸へ行き、『今お昼にお約束した通り参りました』と申しました。餌取

弾正が灯りに松の枝をさしている所



図 9

へ、松下五左衛門はなにげなく切りかかりました。餌取弾正は油断して持っていた刀を受け外し、松下五左衛門の刀で額を切れ、そして脇つばを貫かれ、ついに討ち死にしました（図9）。その時、餌取弾正の女房と息子の二人と乳母の四人が城に火をかけたので、松下五左衛門がおろおろとしているうちに、郡上谷の「赤岩」というところへ落ちのびて、岩の間に隠れていました。その後、切立村の西入坊（切立真観寺の住職）と申すものが女房に出会い、

『さてもあなたはどなたか』

と尋ねると、その女房は手を合わせ、自分をかくまってくれるように西入坊に頼み、西入坊はお供して切立村のお堂の内に女房達を隠しました。それを松下五左衛門が聞きおよび、また西入坊を尋ね行き、

『餌取弾正の女房を出せ』

と申しました。その時、男子の二人の「ふぐり（辜丸）」を後ろへ回し、

『侍の女に目をつけることはやってはならぬ』

と申すと松下五左衛門は諦めて向鷲見村へ帰って行きました。

五 朝鮮陣（朝鮮出兵）の事

鷲見長門守は朝鮮出兵（文禄・慶長の役一五九二～一五九八）

の時、二六〇騎にて遠征され、「岩瀬城」（朝鮮の城）でりっぱに手柄をたてられました。

その時「とらあや」という打物を奪い取り、日本へ帰国なされました。都の王様（豊臣秀吉）へ献上し、多くのご褒美をいただきました。翌年、鷲見殿は京都の警護の役が当たり、供を二三〇人つれていきました。「桑名」より長門守殿は供人を一人召し連れ、伊勢神宮を参宮し、ほかは家老がひきつれ先に進んではいきました。長門守殿は「長谷越」（奈良県桜井市初瀬）に着きました。さらに大和国の「三輪」（奈良県桜井市三輪）の「久保」という山を通られる時、不思議なことがありました。十八・九歳と思われる「わっぱ」（青年）が一人で大木の下に寝ていて、

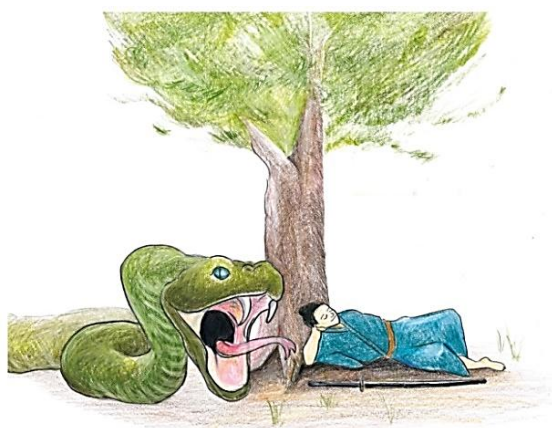


図 10 うわばみがわっぱを食おうとしている

そのわっぱを「うわばみ」（大蛇）が食おうとしています（図 10）。その時わっぱの腰より「山さすが」（刀）が自ずから抜け出て、うわばみの攻撃から守りました。うわばみは彼の腰物（刀）に恐れをなし山へ逃げ帰っていきました。長門守殿はこれを見て、ご自分の「岩切丸」という刀とわっぱの刀と替えてもらいたいと頼んで、替えてもら

いました。

六 鷲見長門守の御料理の事

その後、正月十五日、京都警護の振舞（もてなし）の時、鷲見殿の腰物を見ますと梅檀の鞘に藤の皮を巻いてある柄でありました。国々の諸大名は鷲見殿の手に刀をとらせるため一五日の料理の役目を鷲見長門守殿へ申しつけました（図 11）。鯉の中へ「真魚箸（鉄製の箸）」を差入れ、まな板の上に鯉をのせました。『長門守殿、これをすき切り（うすく切ること）にしたまえ』とおおせつけられました。



図 11 鷲見長門守様が包丁の儀式を行う

『かしこまりました』
と言つてまな箸を取り直し、簡単に「すき切り」にしてしまいました。鷲見殿は
『骨をすかなかったので、このままめし上がり下さい』
と料理を差し出すと、諸大名は恐ろしさで、身の毛をよだてて我も我もと身を退きました。

鷲見殿は一九代にわたって合戦にご出陣して合戦の数は五七度でありました。禁裏（朝廷）から官位をいただいたのは一三代でした。

七 独礼並びに御紋御免の衆

独礼とは鷲見殿に謁見する際にひとりで進み出ることが許されたことをいいます。御紋御免とは自分の紋（図12）を持つことが許されたことをいいます。

次の人は独礼と御紋が許されました。

図12 紋

- ・鷲見大屋九兵衛 独礼と御紋（角けんびし）
- ・向鷲見村蓑嶋藤四郎 御紋（けんびし）
- ・正ヶ洞村 長右エ門 御紋（亀甲に鷹の羽）
- ・同村 与三右衛門 御紋（立鷹の羽）
- ・中桐 下牧戸 御紋（角に鷹の羽）
- ・重兵衛 御紋（丸に鷹の羽）



幕紋



裏紋



定紋

この六人の者は朝鮮陣（戦争）の時に、お供して忠節多き者であつたため、毎年正月一五日に独礼が許されました。

総礼は

- ・切立村 二人 嶋作右エ門、下地善十郎
- ・向鷲見村 四人

- ・西洞村 二人
- ・鮎走村 八人

合計十六人

鷲見鏡代々写真

森保

花押（図13下のサインのこと）

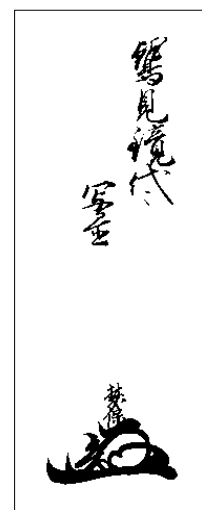


図13 花押

もう一つの鷲狩伝説

鮎走地区所蔵の「鷲見大鑑」

鷲見殿のお生まれについてお尋ねしたところ、大宮様の二男で土岐鷹様と言います。名前を武蔵権守兼大和判官藤原頼保と申されました。その時代は、天皇が世を治めていた時代ですが、関東の北条家がまだ天皇に従っていないので、諸国が乱れていました。後堀川天皇は正月二日に夢をみられ、「ここから北国方向に向かって不思議な鷲が巣を作って籠っている」というところで夢から覚められました。それから百官を集め

『私の叔父為興が六波羅探題（鎌倉幕府による朝廷の監視などをするところ）から監視されたためにどこにいるのか行方が知れない。また鷹司式部もその頃より行方がしれない。この夢はそのお告ではないか』

とおつしやつて、大宮武蔵権守様を呼んで

『鷹の巢のありかを尋ねよ』

と命じられました。権守様は供人三六人を連れて、美濃国へやつて来ました。「忠節村」(岐阜市忠節)に来て川を渡ろうと船を出したところ、川の中に鷺の羽根が流れてきたので不審に思つて拾い上げてみると、白色の羽根で長さは四尺七寸(一四一cm)程で、そこに金色の八幡と申す文字と一首の歌が書いてありました。

『睨が身はかの高山とひとしくて雲や霞の中にこそ住め』

権守様はお探しする人がいるのはこの川上に間違いないと思つて、それより郡上郡へ上つていきました。その羽根を小野村に預け置かれました。今の小野八幡神社です。それより家来を二手に分け、明方方面と小駄良方面へ探しに行きました。頼保様は勇気があり、上ノ保方面をお尋ね上りました。神路村に泊つたその夜、神の御告げがありました。

『この川上に雲ヶ嶽くもがだけという高い山があるので、急いで尋ね上り勅意ちよくい(天皇の命令)を叶へよ』

といわれ、目がさめました。それから出発して、権守様は岩高村にお泊りになりました。雲ヶ岳の様子を聞いているところ、蒲田三郎治かまたさぶろうじ、山口才三郎兩人が来て語るには、

『私共は元雲ヶ嶽の山林に住んでいる者ですが、この頃雲ヶ嶽で鷺の鳴声を聞いています。また不思議な事がいろいろあり

ます。この頃、山狩人やまかりうどという熊獵くまりようをするもの六、七人がかの山へ登つたのですが、岩穴の上に美しき衣類装束いるいしよぞくを着けた髪も結ゆはず、手足に草の足袋たびを履はいた若き男に、顔の恐ろしき三〇才ばかりの男が、具足ぐそく(鎧)を岩穴に掛けて、刀で木を切り熊肉くまにくのような物を若き男に振舞つて、自らもこれをつっていました。彼が獵師たちに

「我等は盗人ではない。その方たちの邪魔になる事はないのでゆめゆめ他人に告げるな」

と一種の宝を取出し、獵師にくれたのです。その品物は才三郎方に有りますが何か判りません』

と申し上げれば、権守様は供人に

『命めいを達するのは近いぞ、ますます忠勤ちうきんするように』

と励ましました。それから山口才三郎、蒲田三郎治の案内で雲ヶ嶽へお登りなされました。さて、鷺の鳴声がかすかに聞こえました。また三丁ばかり行かれると、たしかにまた二声鳴きました。権守殿はこの谷奥に疑いなしと思つて、またそれより「小二声」、「大二声」と申す所にてお休みになされました。いよいよ谷深く尋ねようと思つて、鷺を見るための小屋を作られました。その所を「小城こじょう」と言います。不思議なことに、鷺の右羽根が二羽根落ちていて、これを拾ひろわれて小屋に掛かけられて、それよりここを「大羽落おおはねと」といいます。その間、日数がたつて五日が過ぎましたが鷺のありかはまだ見えません。草木は茂つて

道は通ることのできないので困っていました。そこへ岩高村の小左衛門と申す者がお迎えに百姓三人を連れて来ました。小左衛門が権守殿へ語ったのは、

『驚がどこにいるのかわからないと心配していましたので、お迎えに来ました。』

というと、権守様が言われるには、

『たとえ日数五、七日かかっても驚のありかを見届けないうちは戻るまい』

と仰せられました。そこで小左衛門が言うには、

『深山谷深く、ことさら山口才三郎、蒲田三郎治が言う通り、装束が美しい宮侍が世を忍んでいるのだから、しばらく帰って、その安否については、都へ密使を使わされた方がよろしく、皆さま疲れておられると思いますので、先ず岩高あたりまでお帰りください』

と申し上げました、然らば汝等の申す通り先ず帰ろうと言つて、郎党（従者）に伝えて、松下、最上、竹田、今出川等の者を残し、小左衛門と一緒に「下屋敷（所）」という所より尾根伝いに「七くらがり谷」を通り岩高村へお帰りになりました。その時よりここを「迎鷺見村」というようになりました。権守頼保様は暫く逗留されて、その時山口才三郎、川尻定助兩人が知らせに来て、権守頼保様に向かつて、

『四日以前より雲ヶ嶽に煙が立っています。ここより八合目

あたりに赤色の旗に似たものが見えています。時おりそのあたりで鷺の鳴き声が聞こえるようです』

と申上げれば権守様は頼りにされ、人足六四人を召し連れてお登りなされ、「やつが尾大清水」と申す所に大いなる庵を作つて、そこから人足に言つて雲ヶ嶽への道を切り開き、いよいよ五月上旬、お登りなされました。則ちここを「大屋」といいます。同日鷺の巢をお見つけなされ、諸神を拝礼し、都の方に向ひて祝言をあげられて、鷺の巢の中をうかがっていたら、岩の穴の中に年ごろ二三、四歳位の顔色は清く、眼光は人を射る麗しき人がいました。そのそばに下人と覺しき大きな男が一人おりました。それを見るなり頼保様は礼儀を正し、恭しく

『それにおられるのは憚り乍ら、今上帝の伯父の為興親王様ではないでしょうか。又かたわらにおられる方は鷹司殿ではないでしょうか。私はこの度勅命を受けてはるばる都より尋ね上つた大宮武蔵権守の頼保でございます。ゆめゆめ敵などと疑われないように、そうそう都へお供して今上帝の御叡慮を安んじて下さい』

と伝えますと、

『何分当時の世の中の賊類悪人共が都を攻め、自らも勘当の身ではないが関東の逆賊は私も苦しめ、身をたてることもできませんければ、鷹司の情によつて今日まで、鷺の巢籠りにたえてこの深山に隠れていた。天皇の命令は、天下に渡るので辞退す

ることができない。頼保とやら、天皇へ献上^{けんじょう}するための鷲の餌^とを獲^とつて来てくれ』

と、有難いお命令をなされました。そして親王様は下々の侍や供の人足たちにもお言葉をかけられました。それから長柄^{ながえ}の槍^{やり}を出してみられたら、不思議なことに大石付（槍の下につける金もの）と申すものがありません。また、鷲の一羽根を見ると、これまたありませんでした。為興親王様はすぐには都へは帰られず、六月二三日に都へ権守様と同道^{どうどう}して都へ帰られました。武蔵権守様は二羽の鷲の子を献上されました。その翌月一五日大宮氏を改め鷲見^{わしみ}の因縁^{いんねん}によって名字と家とを給^{たま}わって鷲見家保と改め、建長三年（一二五一）五月一二日今上帝は叔父御^{おじぎ}を迎えた褒美^{ほうび}に美濃の国芥見庄内の川東・川西の領地（一六二三石）を代々鷲見氏^{ちぎょう}に知行なされました。鷹見^{たかみ}のお役料^{やくりょう}に為興親王家より、向鷲見村の領地を給はり、お城をご普請^{ふしん}なされ、その時のご普請^{ふしん}ご見分^{けんぶん}のお役人は稲葉大膳^{いなばだいぜん}に仰せつけられ、同五年（一二五三）八月三日にお城（後に鷲見城^{すみじょう}）ができました。

終わりに

今回、地図と鷲見城の図を除いた挿絵は全て本田奈々さん（東京芸術大学四年生在学中、母親は高鷲出身）に書いていただきました。

文章をわかりやすくするために、話しの文章には『とし、地名や固有

名詞などには「」をつけました。また、文章の中で年号や人名について整合性がとれていないところがあります。鷲見大鑑についてはまだわからない点や課題が残っていることをご了承下さい。

「鷲見大鑑」原本（裕孝司氏蔵）

系図の最後に甚内（作者）と書いてあります。

次に「美濃国郡上郡鷲見大鑑」と題があります。

